

平成 23 年 9 月 1 日	病害虫発生予報 9 月号	茨城県病害虫防除所 茨城県植物防疫協会
--------------------	-------------------------------	------------------------

台風や秋雨等、降雨が多い時期です。天気予報を見て適切に防除しましょう。
－平成 23 年度茨城県農薬危害防止運動期間中です（6/15～9/14）－

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病害虫】	
大豆：紫斑病，チョウ目幼虫	1
サツマイモ：チョウ目幼虫（ナカジロシタバ等）	2
ブドウ：褐斑病	2
ブドウ：べと病	3
果樹共通：カメムシ類	3
秋冬ネギ：黒斑病	3
アブラナ科野菜：ハイマダラノメイガ	4
共通害虫：オオタバコガ	4
共通害虫：ハスモンヨトウ	5
【その他の病害虫】	6
水稻，大豆，ナシ，夏秋ナス，秋冬ネギ，秋冬ハクサイ	
II. 今月の気象予報	
7	
<p>本文に記載されている薬剤は平成 23 年 8 月 25 日現在のものです。 最新の農薬登録内容は、(独) 農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm) で確認することができます。</p>	
<p>詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。 茨城県病害虫防除所 Tel :029-227-2445 予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。 ホームページアドレス http://www.pref.ibaraki.jp/nourin/byobo/</p>	

I. 今月の予報
【注意すべき病害虫】

大豆

1. 紫斑病
[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬以降、降雨・多湿の日が多く、紫斑病の感染好適条件が続いている。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 防除適期は開花期の20日後頃である。本病は、15～30℃で降雨を伴うと発生しやすく、連続した降雨が続く場合は追加防除を開花30日後頃に行う。
- ② 県内では、チオファネートメチル剤に対する耐性菌が出現しているため、それ以外の薬剤を使用する。2回目の防除を行う際は、系統の異なる薬剤を散布する。
- ③ 薬剤散布時期は、茎葉の繁茂する時期に当たる。散布の際は着莢部位に十分薬剤がかかるように丁寧に行う。

2. チョウ目幼虫
[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、寄生虫数は平年より多い。発生種は、オオタバコガ、ハスモンヨトウ、ツメクサガ、ミツモンキンウワバ等である。
- ② 8月下旬現在、ハスモンヨトウの発生地点率は平年より高く、白変葉数は平年並である。
- ③ 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件ではない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。
- ② 薬剤散布の際は、葉裏や着莢部にも薬剤がかかるように丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

サツマイモ

1. チョウ目幼虫（ナカジロシタバ等）

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、被害葉率は平年より高い。
- ② 8月下旬現在、ナカジロシタバの寄生幼虫数は平年並である。また、第三世代幼虫によると思われるつる先の被害を認めている。

[防除上注意すべき事項]

- ① ナカジロシタバは、第三世代幼虫の被害が最も大きい。老齢幼虫になると食害量が多くなるので、若齢～中齢幼虫の時期（丸く穴の開いた葉が散見される時期～葉面積の25%程度を食害された葉が目立つ時期）の防除に努める。
- ② 薬剤散布の際は、幼虫が生息する葉裏までよくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。

ブドウ

1. 褐斑病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、発病葉率及び発生地点率は平年より高い。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 病原菌の翌年への越冬を防ぐため、早期に落ちた葉は回収し、適切に処理する。
- ② 多発した圃場では、防除を徹底する。県内ではアゾキシストロビン剤、クレソキシムメチル剤、ファモキサドン剤に対する耐性菌が出現しているため、それ以外の薬剤を使用する。

(ブドウ 続き)

2. ベと病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、発病葉率及び発生地点率は平年並である。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発生が認められる圃場では、参考防除例に従い果実収穫後の防除を徹底する。
- ② 病原菌の翌年への越冬を防ぐため、早期に落ちた葉は回収し、適切に処理する。

果樹共通

1. カメムシ類

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、ナシの被害果率は平年よりやや低い。
- ② 8月下旬現在、予察灯（かすみがうら市）への果樹カメムシ類の誘殺数は平年並～やや少ない。
- ③ 8月下旬現在、主要な餌場及び繁殖場所であるヒノキ林における果樹カメムシ類の発生は平年よりやや多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 夜温が高いと活動が盛んになり、果樹園へ飛来するので、このような場合は発生に注意する。
- ② 園内をよく観察し、カメムシ類の飛来を確認したら、活動が鈍い早朝に薬剤散布を行う。

秋冬ネギ

1. 黒斑病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、発病度は平年よりやや高く、発生地点率は平年並である。
- ② 気象予報によると、向こう1か月の気温は平年並か高く、降水量は平年より多いと予想され、発生を助長する条件である。

(秋冬ネギ 黒斑病 続き)

[防除上注意すべき事項]

- ① 台風等により葉に傷が生じると、発生が助長されるので、防除を徹底する。
- ② 発病初期の防除に重点をおき、その後の発病状況に応じて薬剤散布を行う。
- ③ 肥料不足等が発生を助長するので注意する。

アブラナ科野菜

1. ハイマダラノメイガ (ダイコンシンクイムシ)

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、笠間市で実施している誘致植物(クレオメ)を用いた調査において、ハイマダラノメイガ幼虫の寄生株率は、平年並～やや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 今後、播種や育苗・定植を行うアブラナ科野菜は特に注意する。
- ② 本虫は、アブラナ科野菜の幼苗期(育苗期や本圃での生育初期)に、幼虫が生長点付近を加害する。加害されると芯止まりになるので、早期発見、早期防除に努める。また、薬剤の育苗トレイ灌注や定植時の粒剤施用は被害を未然に防ぐために有効である。
- ③ 苗床は、防虫ネット(1mm目合い程度)などで覆い、成虫の侵入を防ぐ。
- ④ 薬剤散布は、株の中心部や葉裏にも薬液がかかるように丁寧に行う。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

共通害虫

1. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は水戸市・龍ヶ崎市・筑西市で平年より多い。
- ② 8月下旬現在、大豆等で幼虫の発生を確認している。

[防除上注意すべき事項]

- ① 幼虫の齢期が進むにしたがって薬剤の殺虫効果は低くなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② レタスでは、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、発生初期及び結球始期の防除を徹底する。また、被害を未然に防ぐために薬剤の育苗トレイ灌注は有効である。
- ③ トマト、ピーマン等では、収穫終期まで加害を続けるので、発生しているハウスでは防除を徹底する。
- ④ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

(共通害虫 続き)

2. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
平年並	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は水戸市・笠間市で平年よりやや多く、鉾田市・土浦市・龍ヶ崎市・筑西市で平年並である。
- ② 8月下旬現在、大豆における幼虫の寄生虫数は平年より多い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 幼虫の齢期が進むにしたがって薬剤の殺虫効果は低くなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫の集団の早期発見に努める。幼虫が中齢以上になって分散して食害するようになると、被害量が増大するだけでなく、薬剤の効果も低くなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ② 大豆では、白変葉(若齢幼虫の集団加害によって白く透けた葉)の発生を防除の目安とする。
- ③ レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が入るとその後の防除が困難になるため、発生初期及び結球始期の防除を徹底する。また、薬剤の育苗トレイ灌注は被害を未然に防ぐために有効である。
- ④ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ⑤ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう丁寧に散布する。また、薬剤抵抗性の発生を抑えるために、系統の異なる薬剤を散布する。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項
水稲	稲こうじ病	発生量：平年並 ～やや多い	8月下旬現在，平年並～やや多い発生である。一部多発生の水田が見られる。多発水田の刈り取りは最後に行う等，刈り分けを行う。
	斑点米カメムシ類	発生量：多い	8月下旬現在，平年より多い発生である。クモヘリカメムシの第一世代成虫及び第二世代幼虫，イネカメムシの第一世代成虫の発生をすでに確認している。収穫の遅い水田では，カメムシ類の密度が高まることがあるので，発生には十分注意する。（平成23年8月16日発表の「病害虫速報 No.5」参照）
大豆	アブラムシ類	発生量：多い	8月下旬現在，平年より多い発生である。
	カメムシ類	発生量：平年並	8月下旬現在，平年よりやや少ない発生である。予察灯（水戸市）への誘殺数は平年よりやや多い。
ナシ	黒星病	発生量：やや多い	8月下旬現在，平年並～やや多い発生である。多発した圃場では，収穫後の防除を徹底する。特に，徒長枝に薬液が十分かかるように薬剤散布を行う。
	ナシヒメシンクイ	発生量：平年並 ～やや多い	早生品種で被害果が目立った場合は，晩生品種を対象に，収穫前日数に注意して薬剤散布を行う。
夏秋ナス	ハダニ類	発生量：やや多い	8月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
秋冬ネギ	ネギアザミウマ	発生量：平年並 ～やや多い	8月下旬現在，平年並～やや多い発生である。
秋冬ハクサイ	軟腐病	発生量：－	台風等の強風を伴う降雨の後は，防除を徹底する。

II. 今月の気象予報

関東甲信地方 1 か月予報

(予報期間 8月27日から9月26日)

気象庁 (8月26日 発表)

< 向こう 1 か月の気温, 降水量, 日照時間の各階級の確率 (%) >

[確率]

要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気温	関東甲信全域	30	40	40
降水量	関東甲信全域	10	30	60
日照時間	関東甲信全域	30	40	30

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。

< 1 週目の予報 > 8月27日(土曜日) から 9月2日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 50%

< 2 週目の予報 > 9月3日(土曜日) から 9月9日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率 40%

< 3 週目から 4 週目の予報 > 9月10日(土曜日) から 9月23日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確率 40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬のラベルを必ず確認し, 適用作物, 使用方法, 注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には, 周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 使用後は散布器具やホース内等に薬液を残さず, 良く洗浄しましょう。